

シンポジウム②

かつて、なにわにこんな中医学があった ～中島隨象の遺産～

みどころ

大塚敬節先生の、大塚敬節著作集は、全8巻有り、別冊に、東洋医学史、日本医学史が収められている。

日本医学史の最終行は、(明治)二十七年には漢方最後の巨星浅田宗伯が倒れ、ここに漢方医学の伝統は殆ど絶滅の悲運に陥ったのである。という、嘆きにも似た記述で終わる。

そして、漢方再生の担い手は、昭和初期に、古方派、湯本救真～奥田謙蔵。後世方派、森道伯。昭和10年代以降、古方派、大塚敬節。後世方派、矢数道明と、引き継がれるが、関西には、京都に細野史郎。大阪に森田幸門。そして神戸に、矢数格から一貫堂医学を学んだ、中島隨象の中島漢方舎が有った。大塚敬節1900年生。矢数道明1915年生。中島隨象1898年生のほぼ、同世代人で有る。この中島一貫堂医学に、1965年から1980年代に掛けて、伊藤良、山本巖、松本克彦、田川和光の個性派が集い、この時期に、神戸中医研から、中医学の訳出が意欲的に相次いで出版される中心になって行く。

熱い時代の潮流を、この秋、船堀で、再現する。

山本巖と中医学

日笠久美

河崎医院附属淡路東洋医学研究所

山本巖先生（1924～2001）は戦後日本を代表する漢方家である。鶴田光敏先生の『山本巖の漢方療法』によると、1952年徳島大学卒業後、1955年頃から独自で中国伝統医学、台湾医学、朝鮮医学を学習。1961年大阪に診療所を開設後、1964年西山英雄先生に入門して日本漢方、1968年より中島隨象先生に入門し、一貫堂を中心とした後世方漢方に接した。その後山本先生は1989年に第三医学研究会を設立し、従来の日本漢方や中医学、西洋医学の弱点を補い、知識として積み上げられる、新しい形態の漢方医学の方向性を明確にした。私は1986年頃から山本先生の勉強会に参画したが、その当時、既に新しい漢方医学への姿勢を鮮明にされていたので、中医学に親しむ山本先生を拝見した記憶がなかった。

そのため今回のテーマを受けた時は懸念を覚えたが、改めて調べてみると、1978年上海中医学院の全国統一教科書を翻訳発行した『中医学基礎』に山本先生の推薦文があった。また1981年発行、山本先生著作『東医雑録』にも中医学的な知識が多く記載されており、1982年発行の神戸中医学研究会編著『中医処方解説』でも山本先生が監修として参加している。それらは神戸中医学研究会及び伊藤良先生と歩調を合わせているので、恐らく中島隨象門下で同時期入門の伊藤先生の影響もあり、日本に現代中医学が輸入された黎明期に中医学を積極的に学ばれていたことは間違いない。また1978年日中平和友好条約締結後、1980年から2年続けて神戸中医学視察第一、第二次訪中団（団長：松田涇氏、副団長：伊藤良氏、秘書長：森雄材氏）に参加して、中医学院の中医師とも交流をされている。

これらから卓越した漢方家である山本先生は、日中の古典を読み、系統だった日本漢方や後世方を師匠について学び、最新中医学知識も深く学習した上で、日本漢方、中医学には飽き足らず、第三の漢方医学という御自身の漢方観を確立されたことを再認識した。山本漢方の特徴は、患者の病態を考える時に西洋、東洋の垣根を作らず、西洋医学的病因病理で捉えて、それに漢方療法を当てはめたり、漢方理論を西洋医学的に説明したりするものである。その中で多くの疾患に対する実践的で再現性のある処方を公開された。しかしそれができるためには、患者の漢方弁証が即座に出来て、西洋医学病態と一致させ、成功した実例を日々蓄積する必要がある。生半可なことではない。またその基礎となる方剤の理解には、漢方生薬学が欠かせないと考えていた。その中で中医的生薬学は系統だって分かりやすいからと『漢薬の臨床応用』などの中医学の薬理学書を愛用させていた。

実利主義でシンプルを好むが故に、虚飾をそぎ落とした表現を常にされたが、山本漢方の背景には深く多彩な漢方知識があったことで、精度の高い臨床に結びついたと思われる。山本先生が披露した鋭い処方だけに目を奪われるのではなく、その実践的漢方姿勢を受け継ぐことが我々に課せられた宿題ではないだろうか。